

# 開催報告

## タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2022「助成対象団体オンライン交流会」を 2023年2月7日（火）に開催しました。

タケダ・ウェルビーイング・プログラムは、小児がんなどの難病により、長期にわたり入院や在宅療養する子どもたちとその家族を支援する助成プログラムです。

2020年1月に新型コロナウイルス感染症が日本で確認されてから、その蔓延とともに長期療養の子どもたちとその家族も未だに大きく影響を受けています。2022年の助成対象団体は、コロナ禍においてオンラインを活用した支援に挑戦しながら、オフラインによる人と人とのつながり作りや交流を融合させ、日々活動に取り組んでいます。

今回の交流会では、オンラインを活用した支援内容を共有し合い、さらに支援の情報を当事者にどう届ければ良いのか、考えを深める機会となりました。

### 主なプログラム内容（2時間）

- 2022年助成対象5団体によるプロジェクト報告
- ディスカッション  
『長期療養の子どもと家族に必要なとされるオンライン支援とは』
- アドバイザーコメント など



## 1. 2022年助成対象5団体によるプロジェクト報告

団体名	特定非営利活動法人キープ・ママ・スマイリング（東京都） <a href="https://momsmile.jp/">https://momsmile.jp/</a>
プロジェクト名	小児病棟の付き添い家族に温かい食事を届け、心も支える「お弁当 de スマイリング」事業 普及プロジェクト

### 主なプロジェクト内容

- 「お弁当 de スマイリング」パイロット事業の実施

#### Picup

パイロット事業を6か所実施したが、医療機関の壁が予想以上に大きいことがわかった。しかし付き添い家族にとって食事を届けることは心の支援にもなり、必要だと思う。食支援のノウハウを蓄積しながら、モデル事例を重ねていきたい。



団体名	特定非営利活動法人 OnPal（福岡県） <a href="https://onpal.org/">https://onpal.org/</a>
プロジェクト名	入院・療養中のこども達にICTを使って音楽を届ける活動

### 主なプロジェクト内容

- 院内学級に対するアンケート調査の実施と配信動画の企画開発
- 双方向の対話を可能としたオンライン配信授業の実施

#### Picup

全国256の病院（院内学級）へのアンケート調査を通じて、音楽授業の現状を知ることができた。また回答があった全国20カ所以上の院内学級と今後の連携につながる可能性が生まれたので、活動を拡げていきたい。



団体名	特定非営利活動法人アンリーシュ（東京都） <a href="https://unleash.or.jp/">https://unleash.or.jp/</a>
プロジェクト名	医療的ケア児家族をつなぐボランティアプログラムの企画開発と仕組みづくり

### 主なプロジェクト内容

- ・ボランティア育成の基礎講座および実践講座の企画開発・実施
- ・ボランティア認定式と交流会（オフライン）の開催

#### Picup

ー基礎講座の受講生は当事者家族だが、互いに交流できる機会となるよう、講座内容を毎回工夫している。受講を通して当事者家族の気持ちが前向きになり、自信を持って取り組んでいる様子が伝わってくる。



団体名	一般社団法人星つむぎの村（山梨県） <a href="https://hoshitsumugi.org/">https://hoshitsumugi.org/</a>
プロジェクト名	天井の先の宇宙-星空の下でつながろう

### 主なプロジェクト内容

- ・星つむぎの村のプラネタリウムを伝えるプロモーション動画の作成
- ・星の寺子屋（オンライン交流）と合宿（オフライン交流）

#### Picup

ープロモーション動画は団体の活動や思いを伝える内容に仕上がったので、動画を観た人に共感してもらいたい。また星の寺子屋でつながった子どもたちは、皆で集まる合宿を楽しみにしているので、開催できるよう丁寧に準備を進めていく。



団体名	認定特定非営利活動法人日本クリニックラウン協会（大阪府） <a href="https://www.clinicdowns.jp/">https://www.clinicdowns.jp/</a>
プロジェクト名	小児病棟でのクリニックラウンオンラインイベントの実施

### 主なプロジェクト内容

- ・小児病棟でのオンラインイベントの実施
- ・工作ボランティアと広報ボランティア（こども時間案内人）の募集

#### Picup

ーオンラインイベントは新規病院も増え、着実に実施できている。また療養中の子どもや家族のためのイベント情報を届ける「こども時間案内人」は、協力団体と一緒に情報を発信することで、団体同士のネットワークが育まれている。



## 2. ディスカッション

全団体の報告を終えたあと、団体から「どうすれば小児病棟に入院している子どもや家族に情報を届けることができるのか」と意見が出されました。特にコロナ禍により病院への訪問に制限があるなか、直接話すことができない子どもや家族に情報を届けるには、医療スタッフの協力が SNS などの情報発信が主となります。そのためにも医療スタッフが参加する学会への参加や、同じ目的を持った団体同士が共に協力し合うことの必要性をあらためて確認しました。

## 3. アドバイザーコメント（\*アドバイザーからは本プログラムや各プロジェクトに対する助言を頂いています）

- ・対面支援に戻るなか、コロナ禍で経験知として重ねてきたオンラインを組み入れることで支援に厚みが出る。
- ・地域や関係機関、他団体と上手に連携することで自団体の負担軽減にもつながる。また多様な参加があることで新たな知恵も生まれる。
- ・看護大学の教員にアプローチすることで授業に参加できる可能性もある。看護師を目指す学生には、病気の子どものとその家族が抱えている現状を伝えて欲しい。
- ・団体固有のナレッジを共有し合うことで新たな支援先につながることもある。自分達の活動を「伝える力」を高めることで理解者や支援者にも拡がりが出るだろう。

## 【最後に】

今回の交流会は全体を通して「伝える」がキーワードだったと思います。子どもや家族に情報を伝える、地域や支援者に思いを伝える、医療関係者に活動内容を伝えるなど、参加者にとって新たな気付きと刺激を受けた2時間となりました。本プログラムも「伝える」ことを大切に、今後も取り組んでいきたいと思っています。

（報告レポート作成：市民社会創造ファンド 霜田美奈）